

19世紀アイルランドにおけるナショナリズム運動と 知識人（2・完）

南 野 泰 義

はじめに

[1] 大飢饉前のナショナリズム運動に関する予備的考察

[2] 大飢饉後のナショナリズム運動をめぐる社会的前提

[3] ナショナリズム運動の諸条件 (以下、本号)

(1) 「科学主義的国家」とナショナリズム運動

(2) 政治的ナショナリズムと文化的ナショナリズム

[4] ゲーリック・リーグとオウン・マクニール

(1) ゲーリック・リーグの結成とその活動

(2) 1890年代の政治情勢とゲーリック・リーグ

(3) オウン・マクニールのナショナリズム論

まとめと課題

[3] ナショナリズム運動の諸条件

(1) 「科学主義的国家」とナショナリズム運動

前稿において、19世紀後半アイルランドにおけるナショナリズム運動の前提条件である大飢饉以後の社会的諸条件の変容について検討した。かかる変容の特徴として、3つの点を指摘することができる。第1に、当時、カトリック系の中間層は社会的流動性を獲得したかに見えていた。数字上、社会的流動性に関して、カトリック教徒の実数とその占める割合ともに改善されている。しかし、それは、プロテスタント系住民や英国本土からやって来た者に比べ、カトリック系人口の高い割合からして、はるかに厳しい競争を強いることを意味していた。

第2に、カトリック系住民は、仮に厳しい競争試験によって登用されたとしても、英国本土とは異なり、その後の昇進の可能性はほとんど見込めないものであった。つまり、英国行政機

関における国家への忠誠を守る意味で、上級の公務にはプロテスタント系住民を登用することが多かったのである。結果として、中等教育以上の学校を卒業したカトリック教徒は、高い失業率と自分の能力を活かすことのできないかまたは希望しない職業に着くか、公務員や教師となって低いポジションでの仕事を受け入れるかの選択を迫られたのである。

第3に、カトリック系知識人の雇用の受け皿となっていた下級の公務員や教師といった職業分野の雇用は過剰傾向にあった。それゆえ、処遇や給与、キャリア形成、終身雇用の保証などの点で、プロテスタント系住民や英国からやってきた者に比べて、著しく劣悪な状態に置かれていたのである。

大飢饉以後、主要な争点は土地問題であったが、もう一つ重要な争点として、この時期、カトリック教会による教育改革の要求が浮上してくることになる。それは、主に初等、中等学校と大学におけるプロテスタントの特権を撤廃させることに目的があった。こうした動きは、英国政府によるアイルランドの英国化、つまり同化政策をいっそう強化する契機ともなり、逆説的な作用を持った。英国政府は、アイルランドの近代化推進とあいまって、「対立と懐柔」を基本とする方向性を示し、教育を受けたカトリック教徒を体制内化するための政策を進めるようになるのである¹⁾。

そこには、大飢饉以前と以後における人口構成の大幅な変化と英国における「科学主義的国家」化の進展という問題が背景にあったと考えられる。「科学主義的国家」化の過程は、「封建的生産様式から資本主義的生産様式への転化過程を温室的に促進して、過渡期を短縮するために、社会の集中され組織された強力である国家権力を利用する」²⁾とマルクスが述べているように、資本主義国家への移行期において、資本＝賃労働関係の確立と世俗的で資本主義的な社会秩序を生み出すにあたって、国家権力が社会に対して積極的に介入していく傾向を持っているという点が重要である。アンソニー・D・スミスは、「科学主義的国家」を「効率性を追求するために科学的な技術や手法を駆使して、行政的な目的のために、国家領域内の人々を画一化に統治する体制」³⁾であると定義し、4つの特徴を示している。(1) 人民大衆の同化と統合、(2) 周辺のエスニシティに対する差別、(3) 中央集権化、(4) 政府レベルの科学主義と合理主義の浸透であるとしている。スミスは、「科学主義的国家」を創出する手段として、全国に張り巡らされた行政官僚システムの構築と社会生活への国家的介入が不可欠であるとしている。そして、資本主義的な社会秩序を構築していく過程において、その前提として国民レベルのリテラシー能力の進展が不可欠な要素になってくると指摘している⁴⁾

19世紀後半、英国による「科学主義的国家」化政策のアイルランドへの適用により、社会生活の英国化の進行とともに、公務員や弁護士など公共的な職業のニーズは維持され、警察、教育、厚生、そして救貧法の発令にともなう公共業務の拡大など新しい雇用機会も生み出されてはいた。しかし、アイルランドの知識人、とくにカトリック系および非国教会系の知識人の側

からすると、英国による「科学主義的国家」化政策はアイルランド内でのアイルランド人知識人が公共的な職業に就く機会を奪うものと考えられていた。すなわち、新しい雇用がかれらにとって、必ずしも社会的上昇が保障され、国教会系プロテスタントの知識人と対等平等な条件に置かれることを意味していたわけではなかったのである。

したがって、英国による「科学主義的国家」化政策の進展は、カトリック系中間層にとって、過剰な競争に巻き込まれることを意味しても、自らの専門性を活かし希望する職業に就く機会が開かれたことにはならなかったと言えるのである。つまり、実態的には、過剰な競争と宗派的な差別の問題がカトリック系中間層を苦しめていたのである。教育を受けた中間層のカトリック系住民にとって、英国は平等な機会を獲得できる土地ではなかったのである。かくて、カトリック系住民に対して、形式的に社会的な上昇の可能性が広がったことが、同時に政府に対する抵抗運動を引き起こす前提条件を提供することになっていく。

（2）政治的ナショナリズムと文化的ナショナリズム

次に、アイルランドのナショナリズム運動を考えるための基本的な視点について整理しておきたい。ナショナリズムは、同じネイションを構成していると意識する人々によって、集団的に表現され、かつ制度的に統治されるべきものであるという信条、および政治的正統性に関する近代的な原理である⁵⁾。アンソニー・D・スミスは、ナショナリズム運動について、「ナショナリストというものは、単なる社会を動かす人であるとかイメージ作りの名人であるのではない。自分の活動を通じてエスニックな過去を再発見しその意味を再解釈する社会的で政治的な建築家である」⁶⁾とし、ゲマインシャフト的な契機とゲゼルシャフト的な契機との緊張関係を媒介とした「ネイション」形成の過程において、「歴史の記憶」、「価値」、「神話」、「シンボル」が非常に重要な役割を果たしていると主張している⁷⁾。つまり、ナショナリズムは近代化・合理化をめぐる、政治体制のあり方、その進むべき方向性に関する闘争の過程において現れてくる政治運動であり、かかる運動を正当化し象徴するイデオロギーと考えることができる⁸⁾。したがって、ナショナリズムを政治分析の範疇の中で把握するためには、政治運動としてのナショナリズムがどのように構築され、どのように大衆を動員し、如何にして政治権力に接近していくかに照射することが重要である。

その手がかりとして、ジョン・ハッチンソンのモデルにしたがうと、18世紀末以降、アイルランドにおけるナショナリズム運動は英国の「科学主義的国家」化政策に対抗して組織され、そこには2つの側面が見られるという。文化的ナショナリズムの運動と政治的ナショナリズムの運動である。第1に、政治的ナショナリズムの運動は、すべての伝統主義的な障壁を破壊し、ネイションを合理主義的な観点から統合された市民から構成される国家の建設を戦略的目標としている。それゆえ、かかる運動は集権的な大衆の運動を組織し、政治的自主性の達成に向け

て、国家権力の奪取を方針として掲げるのである。19世紀アイルランドにおいては、オコンネルやパーネルら強力な自治を求める議会主義的な運動の中に具現した。しかし、政治的ナショナリストの運動は、政治権力をめぐる対抗軸の中で展開されるがゆえに、政治情勢の変化——既存の政治権力との力関係の変化、組織の運動力量の変化による影響を受けやすい。それゆえ、かかる運動は目標の達成に向けて、組織を拡大し、大衆的な支持と信頼を獲得するために、新しい政治的局面に対応して、柔軟かつぶれることのない運動方針と獲得目標を示し続けなければならないのである⁹⁾。

第2に、文化的ナショナリズムの運動は、政治的ナショナリスト運動を媒介にして作り出されてきたものとされている。文化的ナショナリストは、ネイションを国家としてではなく、独自の歴史を持った共同体として把握し、下から草の根的に編成されてくるものと考えているのである。そして、かれらは集権的な国家建設を展望しつつも、既存の権力によって強力に推し進められる近代化の圧力に対抗する方策として、自己のネイションと考える特定の領域の中で共通の帰属意識を再生させることを戦略的目標とし、ネイションの統一されたイメージを創り出し大衆化する活動に収斂する傾向を示すのである。それゆえ、文化的ナショナリストは、インフォーマルで集権的でない組織体を形成し、日常生活のあらゆる側面にネイションの意識を注入していくことを主たる運動方針とするのである。たとえば、19世紀後半から20世紀初頭のアイルランドでは、労働組合、農業協同組合、そしてスポーツ団体など様々な同人会的組織をつなぐ緩やかな連合体として運動を展開するのである。ゲーリック・リーグの運動はこのカテゴリの中に含まれる代表的な活動とすることができる¹⁰⁾。

文化的ナショナリズムの運動は、政治的ナショナリズムの運動とは異なり、政治的情勢の変化の影響を相対的に受け難く、組織の盛衰はあっても地道な活動を継続することが可能であると考えられている。しかし、国家は近代世界において、政治的、経済的、文化的な力の拠り所であるがゆえに、国家権力を志向する政治的ナショナリズムの運動と結合せざるを得ないのである。なんとなれば、文化的ナショナリストの運動はそもそも戦略的な目標からして、指揮命令、財政、武力などの面から国家権力に対抗する組織を持つものではなく、それゆえ情勢が変化する中で、国家権力を志向する運動に傾斜する傾向が見られるからである。その意味で、政治的ナショナリズムと文化的ナショナリズムは運動の戦略的な目的を異にしつつも、相互補完的な役割を果たすものと考えられている¹¹⁾。かくて、この2つの運動は独自の統一された政治的共同体を再生するという課題を共有するものであるが、その課題を解決する方法という点で、異なる方向性を示しているのである。

以下、文化的ナショナリズムの運動と政治的ナショナリズムの運動の2つの運動の相互関係を軸に、19世紀後半のナショナリズム運動について検討していく。

[4] ゲーリック・リーグとオウン・マクニール

(1) ゲーリック・リーグの結成とその活動

大飢饉以降、アイルランドにおいて、文化的ナショナリズム運動の先駆けとなったのは、1876年に設立されたアイルランド語保護協会（SPIL）であり、1878年にスタンディッシュ・オグラディによる"The Heroic Period"の出版であった。そして、1884年のゲーリック体育協会（GAA）の設立、1885年のダブリン・ユニバーシティ・レビューの刊行、1891年にロンドンで結成されたアイルランド文芸協会、1892年にダブリンで結成された全国文学協会など、1890年代までに、散文詩作家や民俗研究家を巻き込み、1893年のゲーリック・リーグや1899年のアイルランド文学劇場の設立にいたることになる。また、これらの組織体は、政治的な要求や党派性を正面に掲げるような運動形態を採用していなかったが、ケルト文化の再興とアイルランド島西海岸に住む50万人にのぼるゲール語話者とその習慣を守ることを主たる目的とした大衆運動であった¹²⁾。

こうした諸々の運動の中でも、アイルランドのナショナリズム運動史において重要な役割を果たしたと考えられている組織がゲーリック・リーグである。ゲーリック・リーグは、1893年に結成されたアイルランド語とゲールの伝統の復興を主たる目的とした組織であった。アイルランドや英国におけるゲーリック・リーグに関する研究の多くに、創始者とされているダグラス・ハイド（1860 - 1849）を19世紀後半のアイルランドにおける文化的なナショナリズム運動の代表的な活動家として取り上げる傾向が見られる。しかし、文化的ナショナリズムの運動と政治的ナショナリズムの運動の相互関係から問題を立てると、ゲーリック・リーグの設立に携わり、のちにアイルランド義勇軍を結成し総司令官として活動したオウン・マクニール（1867 - 1945）の存在を忘れてはならない。

アイルランド共和主義者同盟（IRB）の幹部メンバーであったP・S・オヒガーティは、マクニールについて、「アイルランド義勇軍結成の功績はオウン・マクニールに帰するものである。かれは絶好の機会に行動し、運動が生み出された。1893年のゲーリック・リーグ結成において重要な役割を担ったように、今、かれは真に重要な役割を果たしている人物である」¹³⁾と発言している。このオヒガーティの発言について、政治的ナショナリストの側からマクニールの政治的な役割を把握すると、文化的ナショナリズム運動と政治的ナショナリズム運動との相互関係において、マクニールは2つの運動を結びつける接合点に位置する活動家と考えることができる。

こうした点から、ここでは、オウン・マクニールの活動を中心にゲーリック・リーグの活動を見ることにしたい。ゲーリック・リーグ結成の契機は、ダグラス・ハイドが行った1891年のニューヨークでの講演に求められることが多い。この講演において、ハイドが提起した問題は

アイルランドの脱英国化であり、後にゲーリック・リーグの基本理念として確認されていくものであった。しかし、この講演は必ずしも支持されたわけではなく、むしろ非現実的なものと考えられていた¹⁴⁾。

状況が動き出すのは、1893年である。ゲーリック・アメリカン誌に掲載されたハイドの講演録に刺激されたマクニールは、「アイルランドの脱英国化」を基調とした“A Plea and a Plan for the Extension of the Movement to preserve and Spread the Gaelic Language in Ireland”をゲーリック・ジャーナル誌に掲載する。これが発端となって、ダブリンのグレート・ノーザン鉄道の重役J・H・ロイドがマクニールに対して財政的支援を提供するようになる。そして、マクニールはダグラス・ハイドをはじめとしてロイヤル・アイリッシュ・アカデミーのメンバーや教会関係者に向けて、新しいアイルランド語復興運動の結成集会の開催を呼びかける書簡(1893年6月12日付)を送付する動きを開始するのである。かくて、1893年7月31日、ダブリンで集会が持たれ、ゲーリック・リーグが結成される¹⁵⁾。この集会では、リーグの指導部が選出され、ダグラス・ハイドを総裁に、マクニールが事務局長、そしてロイドが財政部長に就任することになる¹⁶⁾。

マクニールは1867年5月15日、北部アイルランドのアルスター地方アントリムのグレンアームでベイカーリー店を営むアーチバルド・マクニールとロゼッタ・マコーリーの四男として生まれた。かれの父親であるアーチバルドはダニエル・オコンネルの支持者であり、グレンアームでのオレンジ・ロッジのデモに反対して起訴されるという経歴を持つナショナリストのシンパであった。また、かれの伯父にあたるチャールズ・マコーリーはカトリックの神学者であったが、ゲル的な伝統に強い執着を持つ人物であった。マクニールは、ナショナリスト的な家庭環境の影響を強く受けつつも、中等教育課程に進み、公務員になるための競争試験の受験を目指しており、英国的価値観への適応と過度な競争の中におかれた当時のカトリック系中間層の子弟の一人であった。マクニールは公務員登用の希望を実現することができたが、過度な競争と登用されたとしても下級の業務に位置づけられるという状況の中で、教育制度と官僚システムに対する反発から、アイルランドの習慣や言語に強い関心を寄せるようになる。そして、マクニールはダブリンの役所において下級書記官の職を得た直後の1887年に、アイルランド語の習得を決意する。その後、当時のロイヤル・ユニヴァーシティに進み、経済学と法制史を修め卒業すると、カトリック教会の聖職者たちによるアイルランド史研究の取り組みに結合するようになる。そして、政治的には、マイケル・ダビットの土地同盟が採用した路線に深く心酔するようになる。かれをナショナリズム運動に駆り立てたのは、他のナショナリストと同様に、英国政府によってもたらされたアイルランド人に対する社会的な不平等に対する不満であった¹⁷⁾

そこで、かれは、1890年から1895年にかけて、エドモンド・ホーガン師のもとで、中世に書かれたアイルランド語の書物を研究し、アイルランド史研究の第一人者として見とめられるよ

うになる。のちに、かれは、メイノースのアイルランド語の教授となり、ゲーリック・ジャーナル誌 (Gaelic Journal) の編集長であったオグローニー司祭の勧めで、アラン島に赴き、英国と英語の影響から隔絶されたこの島をゲール復興の精神的な拠点と考えるようになる¹⁸⁾。

ここで重要な点は、ゲーリック・リーグの組織内におけるマクニールの位置である。ゲーリック・リーグの結成以降、マクニールはゲーリック・リーグの書記局長に就任するとともに、1894年から1897年までゲーリック・ジャーナル誌の編集長を兼務し、リーグ機関紙アン・クレイヴ・ソリッシュ (An Claidheamh Soluis)¹⁹⁾ の発刊・編集を指導していた。そして、1895年には、フェイス・キュール (Feis Ceoil) という名の出版社を設立し、ゲール語のテキスト、ゲール音楽や楽器の販売を手がけるようになる。事実上、マクニールは、リーグの運動方針や思想状況を左右できる立場をあったと考えられ、ダブリンのリーグ・メンバーの人脈を掌握するとともに、ロイドを介する形でリーグの財政に影響力を持つ位置にあった。そして、マクニールはオグローニー司祭を介して、カトリック教会の聖職者とのネットワークを仕切るなど、カトリック教会との間に強いパイプを持ち、ゲーリック・リーグに対するカトリック教会の支持を取り付けることができたのである²⁰⁾。

したがって、これらの点から見て、ダブリンから離れたロスコモンを拠点としていたハイドはゲーリック・リーグの代表として指導部に参加をしていたけれども、実際には、ゲーリック・リーグの組織運営を握り指導的な役割を担っていたのはマクニールであったと考えることができる。

ゲーリック・リーグのスタンスを考えるにあたり2つの事件が重要となる。第1に、ゲーリック・リーグは、1890年代、学校教育におけるアイルランド語の必修化を進めるキャンペーンを展開していた。ゲーリック・リーグの活動は、1899年、トリニティ・カレッジの学寮長であったジョン・ペントランド・マハフィーが中等教育の教育課程からアイルランド語を排除しようとしたことにより始まった反対闘争を機に、大衆的に認知されるようになる²¹⁾。この動きに対して、議会主義的な政党やカトリック教会は消極的な姿勢をとっていた。かかる反対闘争は、ゲーリック・リーグの指導のもと、GAAと都市の下位中間層を支持母体としていた。その活動内容は、ゲールタハト地域²²⁾ に存在する地域文化や生活様式を理想化する傾向を強く持っていたのである。

第2に、1909年、新しく開設されたナショナル・ユニヴァーシティにおける入学資格について、アイルランド語の習得を必須とすべきかどうかをめぐる、2つのナショナリスト勢力が対立した。この2つの勢力は、マクニールのゲーリック・リーグと英国からの議会主義的な自治を目指すアイルランド議会党の指導者の一人であるジョン・ディロンであった。ディロンはアイルランド語に対しては心情的には理解を示しつつも、「必須」とすることに反対していた。ディロンにとっては、アイルランドのネイションとしての自律性を担保するものは、アイルラ

ンド人による自治政府の樹立に他ならなかったのである。それゆえ、アイルランド語を過度に強調することは、プロテスタントとカトリックを分裂させるばかりか、アイルランド語と英語の話者を分断することになり、統一した政治運動を組織できなくなるという観点に立っていた²³⁾。これに対して、ゲーリック・リーグは、ディロンらが主張する自治政府の樹立に対しては支持する立場をとっていたが、かれらにとって、アイルランド語はアイルランドにおけるゲールの伝統と歴史的なネイションとしてのアイルランドを示す生命線であった。それゆえ、「必須」化は避けられない要求であった²⁴⁾。

マクニールは、アイルランドの政治的な自立とアイルランド語との関係について、「私の立場からすると、アイルランド人のナショナリティは他と区別されるアイルランド文明を意味するものではないとしたら、私はアイルランドの国家的独立にそれほど大きな価値を見出さないであろう。私自身、個人的な自由を求めるとしても、それは私自身がそうあり、私自身の人生を自分らしく生きるためであり、他人の使い古した古着を着て生きることではない。確かに、人間の自由について、人は模倣者であるかもしれない。しかしそれは自由を自主性もなく使うことではない。もし私がわが民にナショナルな自由を求めたならば、それはかれらがかれら自身のやり方でかれら自身の人生を歩むためであり、かれら自身のナショナリティ、他と区別されるかれら自身の文明空間を維持し発展させるためなのである」²⁵⁾と述べている。

ゲーリック・リーグは、政治性と党派性の排除を運動の原則としていたがゆえに、プロテスタントやユニオニストからの支持を取り付けることができていたが、このマーフィー問題とナショナル・ユニヴァーシティの大学入学許可要件問題は、かれらが指向していた言語復興運動に政治的な色彩を与えることになる²⁶⁾。

(2) 1890年代の政治情勢とゲーリック・リーグ

大飢饉以後、アイルランドにおける政治的ナショナリストの運動は二つの潮流が交差する形で展開する。一つは、武装闘争も視野に入れたフィニアン／アイルランド共和主義者同盟(IRB)から20世紀のシン・フェイン党につながるリパブリカンの流れである。もう一つは、オコンネル、パーネルらの議会主義的なナショナリスト運動を継承し、アイルランド議会党に至る主流派ナショナリストの流れである。

まず、リパブリカンのついて見ると、この潮流は、大飢饉以降、主にアメリカで設立されたフィニアンとして知られるIRBに組織されていた。1865年と1867年の武装蜂起の失敗を受けて、アイルランドにおけるフィニアンは、1868年以降、ジョン・ティボイとマイケル・ダビットは革命的煽動と農民への啓発、議会主義勢力との共同という新しい方針のもとで、運動の再建を進め、1878年にはダビットを軸にして土地同盟が設立された。だが、この運動体は大衆的な組織形態をとっていたが、主にアイルランド系アメリカ人によって支援されたものであった。当

時、フィニアンは、アイルランドにおける土地問題をめぐる闘争が革命的ナショナリストの政治的運動を促進するものであるというスタンスに立っていた。そして、アイルランドの独立を達成しようという議員グループを組織するとともに、英国議会から議員を引き揚げるといふボイコット戦術を採用していたのである²⁷⁾。その後、IRBは1883年のイングランドでの爆弾攻撃キャンペーンに失敗し、主要な指導者は投獄またはアメリカへ脱出するなどして指導部の著しい弱体化に陥り、以後、ほぼ20年の間、地下に潜伏することを余儀なくされることになった。

以上のように、リパブリカンの運動が後退する状況の中で、アイルランド政治の中で重要な位置を占めることになるのが議会主義的なナショナリストの潮流である。この潮流は1840年代のダニエル・オコンネルのリピール運動を源流に持つ。そして、プロテスタントを中心としたホーム・ルール＝アイルランド自治要求が政治課題になってくる1870年代、ジョージ・ショウ、アイザック・バット、ウィリアム・ショウの指導の下に、ホーム・ガバメント・アソシエーションおよびホーム・ルール・リーグの運動が現れてくる。

ここで留意すべき点がある。それは、1870年代に展開されるアイルランド自治を求める運動がカトリック系のナショナリスト勢力からではなく、プロテスタント系ナショナリスト主導で展開していくことにある。このことは、英国によるカトリック解放政策の進展と密接に関連している。アイルランド自治要求は大飢饉とオコンネルのリピール運動の崩壊を受けて、2つのベクトルを持つようになる。英国からの完全な分離を展望するリパブリカンと漸進的改革を重視し、1860年代には自治要求を半ば放棄することになる修正主義的なナショナリストである。後者の運動はアイルランドの改革は英国議会から勝ち取るものであり、連合王国内に留まることにより改革をスムーズに進めようとする立場である。この立場はポール・カレン大司教ら中心として1860年代に運動の拡大を見る。その帰結が、1869年のアイルランド教会法の成立であった。このことは、1829年のカトリック解放法の成立ともあいまって、プロテスタント勢力にとって、英国政府との特権的な関係が解体されるとともに、プロテスタント勢力の政治的影響力の著しい低下、とくにプロテスタント系中間層からすると、カトリック系中間層と同様に厳しい社会環境の下に置かれることを意味していたのである²⁸⁾。

こうした情勢を反映する形で、1870年に、アイリッシュ・プロテスタントを軸にホーム・ガバメント・アソシエーションが結成される。この団体が1800年以前の状態に回帰することを目的としていたわけではなく、カトリックをめぐるアイルランド社会の変化を前提に、プロテスタント勢力がそれに如何に適応していくべきかという立場に立っていた。むしろ、英国政府が頭越しにアイルランドの改革を進めていることに対する反発から、政治的な意思決定に関わる自主権の獲得を長期的課題においていた。しかし、現実には、大衆的な要求はむしろ土地改革、雇用拡大、カトリック系大学の設置などが主流を占めており、70年代の運動方針は第一義に土地問題が行かれており、自治問題は二次的課題に過ぎなかったのである²⁹⁾。

1880年総選挙においてナショナリストの勢力が拡大すると、ナショナリストの協力を得た第2次グラッドストーン自由党政権は、1881年に土地法を成立させることになる³⁰⁾。パーネルらのナショナリストは土地問題による勝利を受けて、新しい局面のもとで、運動の再構築が求められることになる。そして、運動の舵は大きくきられることになる。つまり、新たな局面における運動方針は、アイルランド自治の達成を最も重要な政治課題とするものであった。

こうした情勢の中、1870年代の運動組織の延長線上に、1882年10月、アイルランド系アメリカ人の家系を持つプロテスタント系地主階級出身であるチャールズ・スチュアート・パーネルが自らが総裁を務めるアイリッシュ・ナショナル・リーグ (INL) をベースに、ホーム・ルール・リーグ、ホーム・ルール党を巻き込む形でアイルランド議会党が結成される。つまり、1880年代、アイルランド議会党はアイルランドの政治的ナショナリズムの本流に位置する政党であったといえることができる。また、この政党はそれまでの政治結社が緩やかな組織形態をとっていたのとは対照的に、厳格な党則と集権の指導を原則とした組織形態を特徴とする近代的な組織政党であった。そして、この政党はカトリック教会との密接な関係を背景に592の支部を全国に持つとともに、アイリッシュ・ナショナル・リーグの1,262支部の広範な支持基盤に支えられた党であった³¹⁾。

かくて、1882年の結党から90年代初頭にかけて、アイルランド自治要求はこのパーネルのアイルランド議会党を軸に展開することになる。

当時、アイルランド議会党は英国議会において、英国下院における自由党と保守党との間のバランスとしての地位を利用し得る立場にあったと考えられている。つまり、アイルランド議会党は、両党いずれかとの連合ないしは協力関係を模索することで、議会におけるマジョリティ形成をめぐる競争する自由党と保守党と交渉することができたのである。そして1886年2月、グラッドストーンはアイルランド自治の実現を政策提起することにより、ナショナリストの支持を獲得して自由党政権を編成することになる³²⁾。

グラッドストーンがアイルランド自治支持にまわったことで、ソールズベリー卿とランドロフ・チャーチルの指導下にあった保守党は、アイルランド自治の具体化に対して徹底的に抵抗する姿勢を示すことになる³³⁾。しかしすでに、アルスターのユニオニストはアイルランド自治はアルスターにおけるプロテスタントの地方的な優越、経済的な困窮をもたらすものであるという立場を明確にしており³⁴⁾、とくにアルスター6郡（のちの北アイルランド）においては最大の政治勢力となっていた。そして、ユニオニストは、ホーム・ルール法案をめぐる、保守党との連合を模索するために、エドワード・サンダーソンを中心にアイルランド・ロイヤリスト議会党を結党し、1885年総選挙では、保守党候補の支援にまわり、1886年には、保守党と結合する情勢にあった。

こうした情勢の中で、第3次グラッドストーン政権は、第1次ホーム・ルール法案³⁵⁾を議会に

提出する。しかし、アイルランド自治に反対するジョセフ・チェンバレンが、グラッドストンの関税政策に反発して分派とともに自由党を離党し、リベラル・ユニオニスト党を結党すると、保守党との連携を図るようになる。そして、リベラル・ユニオニスト党は、1886年6月、第1次ホーム・ルール法案に対して反対票を投じ、第1次ホーム・ルール法案は否決される³⁶⁾。このリベラル・ユニオニストの離脱により、自由党の議会内でのマジョリティは崩れ、第2次ソールズベリー保守党内閣が成立する³⁷⁾。

かかる自由党の分裂は、アイルランドの議会主義的ナショナリストの思惑を大きく狂わすことになる。

1892年総選挙の結果、第4次グラッドストン自由党政権が成立し、第2次ホーム・ルール法案³⁸⁾が1893年2月に議会に提出された。この法案は、アイルランドの議員代表を継続しつつも削減する内容が盛り込まれており、ユニオニストに配慮した内容になっていたが、上院において再び否決されてしまう。この間、エドワード・サンダーソンは1893年にアルスター防衛同盟を設立し、武装の視野に入れた反対闘争を組織するようになる。そして、1894年、領土拡張路線に立つ自由帝国主義派のローズベリーが自由党政権を継承することにより、アイルランド議会党と自由党との連合は過去のものとなった³⁹⁾。

1895年総選挙では、保守党はリベラル・ユニオニスト党と連合し「ユニオニスト党」として選挙戦に臨み、「ユニオニスト党」が411議席（自由党177議席、アイルランド議会党70議席）を獲得し、第3次ソールズベリー内閣が組閣された。これを受けて、アーサー・グリフィスらアイルランドのリパブリカンは議会ボイコット主義を奨励する政党<シン・フェイン党>の結成に動き出す⁴⁰⁾。

1895年から1905年の保守党政権は、「寛容によって、アイルランド自治を抹殺」⁴¹⁾する機会と捉え、一連の行政的、法的な改革を実施した。経済的な不平を改善し救済することを通じて、アイルランド人小作の保守化を図り、支持基盤への取り込む政策が採用されたのである⁴²⁾。

こうした保守党政権の方針は、アルスターを中心に、T.W.ラッセルやオレンジ団の反発を招き、アイルランド自治反対の大衆運動を活発化させることになる。そして、1905年には、エドワード・カーソン卿やジェームズ・クレッグを中心とするアルスター・ユニオニスト協議会(UUC)が創設され、ホーム・ルール法案に対する反対闘争を強める姿勢を示していた。また、この時期は、アイルランド議会党の最大のライバルとして、シン・フェイン党の台頭を見ていた。1908年2月、北リートリム選挙区で行われた英国下院補欠選挙に、シン・フェイン党は元アイルランド議会党のチャールズ・ジョエフ・ドーランを党公認候補として擁立することに成功し、レドモンド率いるアイルランド議会党=自由党連合と議席を争うまでに成長していた⁴³⁾。

1880年から90年代の情勢のなかで、アイルランドの政治的ナショナリストの運動は大きくその配置を変容させることになる。土地問題に目処がついた時点で、ホーム・ルール法案問題が、

自由党の動向ともあいまって、争点となって浮上してくる。この局面において、これを継承したアイルランド議会党の議会主義的なナショナリストは、英国自由党と保守党の間にあって、キャスティングボードを握るという状況を作りつつも、現実には、自由党と保守党の政権争いにアイルランド問題が左右される関係にあり、問題解決に向けたイニシアティブを取れる状況にはなかったのである。むしろ、保守党と自由党の政権争うの従属的関数の位置にあったと言えよう。

このことは、1889年を前後して発生したパーネルをめぐる政治危機からも明らかである。この危機は、パーネルとキャサリン・オシェアをめぐる不倫問題との関係で説明されることが多い。しかし、この危機の背景には、自由党の圧力が存在していた。自由党は、1886年の第1次ホーム・ルール法案の否決と党の分裂、野党への転落という事態に直面し、党が下野した原因をアイルランド議会党との協力関係を重視するあまり、性急にホーム・ルール法案を提出したことに求める見解が大勢を占めるようになる。そして、こうした事態を招いたグラッドストーンに対して、その責任を追及する動きが強まる。こうした党内情勢の中で、自由党指導部はアイルランド議会党に対して、自由党との協力関係を継続する前提として、ホーム・ルール法案の成立の強い執着を持つパーネルの退陣を強く求める態度に出たのである。これは次期選挙で政権獲得に必要な議席の致命的な部分を失うことを覚悟しての決断であった。つまり、自由党は党の団結を優先したのである。自由党はパーネルのスキャンダルを利用する形で、パーネルに圧力をかけることになる。自由党の強い要求に対してカトリック教会と議会党メンバーはパーネルが退陣せず、党総裁として指導的地位に留まることは、将来のアイルランド自治の達成を妨げる障害物になるという見解を示した。そして、党副総裁のジャスティン・マッカーシーを押し動かすようになる。自由党の狙いもそこにあった。グラッドストーンは、1890年11月、マッカーシーに対して、パーネル退陣がなければ、自らの指導力も失われ、ホーム・ルール法案は棚上げにされるであろうと伝え、パーネルに退陣を迫ることを約束させている。しかし、パーネルは自由党の要求を拒否し、指導者としての地位に留まったのである。こうしたパーネルの行動は、党内に親パーネル派と反パーネル派の軋轢にいつそう拍車をかける契機となった⁴⁴⁾。

このように、ホーム・ルール問題について目処が立たない情勢の中、議会主義的ナショナリストの運動方針はホーム・ルール法案の扱いによって左右され、結果的には自由党の動きに従属する関係におかれていた。このことが、リパブリカンや非主流派のナショナリストのみならず、アイルランド議会党メンバーをして議会主義的運動に対する焦燥感と無力感を拡大させる契機となっていた。こうした状況に追い討ちをかけるように、1892年総選挙で成立した第4次グラッドストーン自由党政権が提出した第2次ホーム・ルール法案が再度否決されると、アイルランド議会党はその求心力をいつそう弱めることになる。

1892年、アイルランド議会党は分裂の危機に立たされる。レドモンドの親パーネル派とデイ

ロンの反パーネル派との分裂である。すでに、この兆候は1891年のディロンによるアイリッシュ・ナショナル・フェデレーション（INF）の結成に現れていた。そして、議会党の指導者の1人であったウィリアム・オブライエンが離党し、1895年には、ディロンの支援を受けて、ユナイテッド・アイリッシュ・リーグをマーヨ郡ウエストポートで結成する。他方で、ジェームス・コノリーやアーサー・グリフィスによる新党結成に向けた動き、またラーキンらによる社会主義運動の拡大など、新たな運動の組織化が進む。かくて、議会主義的ナショナリスト＝主流派ナショナリスト政党はその求心力を失う中で、土地同盟期のように、リパブリカンを含むナショナリスト諸勢力を包摂しうる運動を展開できず、それゆえセク特的分裂状況が加速するような状況に至っていた⁴⁵⁾。

このように、ナショナリストの団結が弛緩し、運動が後退しつつある局面のなかで、ゲーリック・リーグの結成とその活動の政治的な意味を把握することが重要である。ゲーリック・リーグは非党派性を原則としたが、このことは戦略的目標、運動方針、組織原理に関して厳しい縛りを持たないという意味で、かつ文化的・教育的活動の境域に限定された活動に拠点を置いていたがゆえに、何らかの政治要求に直接結合しないという意味で、多様なスタンスを取るナショナリストを巻き込む前提条件となっていたと言える。それゆえに、ゲーリック・リーグは、政治的な要求やイデオロギーの相違を前提にしつつも、アイルランドの伝統と言語を守り、育て、発展させるというナショナリストにとって否定しがたい目標、その一点において結束しうる場を提供することができたと思われる。すなわち、政治的ナショナリストがセク特的分裂状況に至るなかで、その受け皿としての役割をゲーリック・リーグが担ったと考えることができるのである。

（3）オウン・マクニールのナショナリズム論

ここで、マクニールのナショナリズム論を検討するにあたり、「アイリッシュ・アイルランド」なる概念が重要な意味を持つことになる。この概念は、1840年代のトーマス・デイビスや青年アイルランド党の文書の中にも見られるものであるが、90年代には入り、ダグラス・ハイドの「アイルランドにおける脱英国化の必要性」を説いた講演とその講演録が契機となって、マクニールを介して論理的な定式化が行われることになる。そのモチーフは、アイルランドの文化的、経済的な自立を図る上で、政治的な自主性は不可欠のものであるというスタンスに立つものである。それゆえ、アイルランド的な価値を侵食し破壊している源を英国に求め、反英闘争の手段としてアイルランド語の復興とアイルランド的社会秩序の積極性を再確認するという点に収斂するものであった⁴⁶⁾。これは、ゲーリック・リーグを経由して、デイヴィッド・P・モーランらのカトリック系知識人を中心に、アイルランドにおけるプロテスタント優位の打破を目的としたアイリッシュ・アイルランド運動の理論的前提を提供するものであった⁴⁷⁾。

さて、マクニールは、まずアイルランドにある独自の共同性を強調することによって、アングロ・ノルマンの侵入以来、アイルランド語を社会発展の過程から排除した英国を擁護する人々を攻撃することから出発する。そして、ネイションを国家権力と結びつけようとする合理主義的な考え方に警告を發し、アイルランドのネイティブな人々の起源を探求することを強調するのである。マクニールは、その代表的な著書である“Phases of Irish History”の中で、「われわれは、ばらばらの人々から形作られた一つのネイションという明確に形作られた概念を知っている。だが、そうした人々が、自分たちが生まれた大地にその起源を求めることによってこそ、一つのネイションが作られるのである」⁴⁸⁾と主張している。つまり、マクニールにとって、アイルランド・ネイションに関するイメージを作り上げていく前提として、ネイションは自然と文化の単位であり、ナショナルな意識は大衆の下からの自発的な覚醒によって生み出されるべきものであったと考えられる⁴⁹⁾。

そこで、マクニールは5つの点からアイルランド・ネイションのイメージを定式化している。まず第1に、アイルランド・ネイションについてアイルランド島に侵入したケルト人が先住民を征服し、その後ブリテン島とガリアからの移住者と融合したことにその起源を求めようにする⁵⁰⁾。

第2に、ネイションとしての成立を紀元5世紀末以降のことと考える。それは、アイルランド内部がケルトとケルト侵入以前から先住者にとり未だ分裂しており、内部的な混乱の時期であったからだとする。そして、この混乱を取り除いたのが聖パトリックの「奇跡」であり、ケルト文化とキリスト教の宗教的エートスが融合したのを契機に、アイルランド・ネイションの独自性が作り出されていったと考えるのである⁵¹⁾。

このように、アイルランド・ネイションの起源を「ケルト的なもの」にそのまま流しこむのではなく、キリスト教的なエートスによって陶冶されたという契機を重視するのである。

第3に、紀元6世紀から8世紀にアイルランドの「黄金時代」が到来したとして、アイルランドはヨーロッパの中で、ナショナルな文学を創造する先駆けとなったのだと主張する⁵²⁾。そして、その担い手をキリスト教聖職者に求めるのである⁵³⁾。

第4に、この「黄金時代」に形作られたネイションとしての共同性とその規範たる「アイルランド法」はその後、ノルマン人が持ち込んだ商業や封建制度を包摂し自分たちのものに変えていく生命力を維持していたと主張するのである⁵⁴⁾。しかし、なぜアイルランドのゲール的な性格が失われていったのかという点について、その原因を17世紀のイングランドによるアイルランド征服に求めるのである。この征服とイングランド主導の教育制度の導入により、つまり17世紀以降、アイルランド語は排除され、合理主義的な理念が注入される過程で、アイルランドはそのゲール的な性格を失うことになったとするのである。⁵⁵⁾

第5に、アイルランドの独自性を象徴するものとして、知識階級や教育を受けた層がアイル

ランド語を捨てて行ったにもかかわらず、農村地域においては、英国による同化の圧力にも耐え、より広範にかつ大衆に生き残っているアイルランド語の存在を強調する。そして、この生きた言語であるアイルランド語を近代的で大衆的な文化に高めることが、アイルランドの再生の鍵であると位置づけるのである⁵⁶⁾。

このように、マクニールはアイルランド・ネイションの性格をアイルランド語とキリスト教的エートスに求めようとした。マクニールは、17世紀以降にアイルランドが置かれた状況を打破する方法として、地方の大衆レベルで生き残っているゲール語とそれに基づく地方文化をナショナルなものに高めていくことが必要であると考え、排除されつつある言語をアイルランド全体の大衆的な生きた言語に変え、これを近代化を進める媒介物とすることを目的としていた。マクニールにとって、アイルランド語の復興は、ゲールのなアイルランド・ネイションの再生のために不可欠な手段と考えられていたのである。

しかし、主にプロテスタントの側から主張されるような、アイルランド、ウェールズ、スコットランド、そしてブルターニュを含むケルト・ネイションの再生を念頭に置いた汎ケルト主義に対しては否定的な姿勢をとっていた。なぜならば、こうした汎ケルト主義はケルト的なるものとカトリック教会を切り離すものと理解していたからであった⁵⁷⁾。それゆえ、アイルランド語復興運動を推し進める指導的役割をカトリック教会の聖職者たちに求めようとするのである。かくて、マクニールのアイルランド語復興の要求は、本来的にカトリックとプロテスタントを分かち契機を内包するものであったと言える。

また、人間の肉体的な特徴に結び付けた定義を否定し、ナショナルな性格は人間の合理的で精神的な部分に属するものと考え、「ネイションは血縁関係に基づくものという以上に、養子縁組関係のようなものである」⁵⁸⁾と主張する。そして、「血縁意識はアイルランド人のアイデンティティを形作る生きた力ではない」⁵⁹⁾と言うのである。

マクニールは、かかる運動を具体化する方策として、ゲーリック・リーグの設立などを通して、初等教育からアイルランド語とアイルランドの歴史を教えることのできる教育制度の構築を求める運動を組織する活動を進めていくことになる。

1851年国勢調査によると、アイルランドにおいて話されている最大の言語は英語であり、76.7%がアイルランド語を話すことができなかった。アイルランド語話者の総数は1,524,286名で、アイルランドの全人口の23.3%であった。そのうち、英語を使うことができず、アイルランド語のみを使う者は319,602人であり、全人口の4.9%であった。

また、10歳以下を見ると、レンスターで3.5%、アルスターで6.8%、ムンスターで43.9%、コナハトで50.8%であり、最もアイルランド語話者の比率が大きいのはゴールウェイの61.4%であった。

1891年国勢調査では、アイルランド語話者は680,245人（14.5%）にまで大きく減少し、アイ

ルランド語のみを使用する者も38,121人に減少している。1891年の調査では、85.5%がアイルランド語を話さないという結果がでることになる。ただし、ドニゴールでは、人口に占める話者の割合が28.7%から33.4%に増加傾向を示していたのである。まとまった話者が存在するのは、西部から南東部の一部にかけてのクレア、コーク、ドニゴール、ゴールウェイ、ケリー、マーヨ、ウオーターフォードの各カウンティに見られる状況となっていた。

1911年国勢調査には、ダブリンなど都市部においてアイルランド語への関心やその普及の兆しも示されていたが、このことはゲーリック・リーグが高等教育を受けた知識人と都市部の下級中間層を基盤としていたことと関係していた。だが、1911年国勢調査では、アイルランド語の話者は582,446人(13.3%)であり、アイルランド語のみを使用する者も16,873人(2.9%)まで減少していた。その内の93,684人が西部地域に居住しており、アイルランド語を日常的に使用している者はいっそうゲルトタハト地域に限定されていることがわかる。しかし、それは同時に、ゲルトタハト地域におけるアイルランド話者の傾向的減少がより確実なものであることを証明していたのである。その主たる原因の1つに、アイルランド西部地域におけるアメリカ合衆国や英国本土への移住者の増加と人口の著しい減少という問題が存在していた⁶⁰⁾。

このことは、ゲーリック・リーグ指導部の危機意識をいっそう深めることになる。ゲーリック・リーグ指導部は、1911年国勢調査の結果を受けて、アイルランド語話者である西部地域の零細農民層の流出を防ぐ手立てとして、かかる地域の物質的な生活条件の改善を求める運動に踏み出し、ゴールウェイにおける住居および生活の水準を向上させるためのアクションプランを作成するようになる。しかしながら、この種の動きは、一部のリパブリカン分子によってすでに実行され、社会運動化が進められていた。また、ゲーリック・リーグのメンバーであり、「リーダー」の主幹であるデイヴィッド・パトリック・モーランのように、「アイリッシュ・アイルランド」を実現する運動はアイルランド自治の獲得なしには実現しえないと考え、ナショナリスト政党に物質的な支援を提供する部分も存在していた。ゲーリック・リーグは1891年を契機にして、いっそう政治的要求を掲げる運動へ傾斜する動きを強めることになる⁶¹⁾。

こうした状況にあって、マクニールは、運動の原点に立ち返ることを訴え、ゲルトタハトにおいては生きた言語であるアイルランド語の保護をあらためて強調するのである。そして、マクニールはアイルランド語を自分たちの真の遺産として復活させることによって、新しい発展段階にアイルランドを導くことができるとし、イングランドのようなネーションを形成するという展望を示そうとしたのである。つまり、マクニールにとって、アイルランド・ネーションの形成は近代性と伝統性の両方を体現するものとして理解されていたのである⁶²⁾。

マクニールによる「アイルランド的なもの」の定式化とその実現に向けた活動は同時に、国家権力の奪取を志向する政治的なナショナリズム運動を刺激する効果を持ったということである。マクニールは言う。「もし、アイリッシュ・ナショナリティが独自のアイルランド文明

を意味しないとしたら、私はアイルランドの国家的自律に何の価値も見出さないであろう」⁶³⁾と。

かくて、マクニールにおいて、政治権力の掌握という政治的目標は「アイルランド的なるもの」の再生という問題に媒介された課題として把握されていたのである。それゆえ、かれは非党派的な活動をベースに、1913年のアイルランド義勇軍の創設者として、政治活動に強く傾斜する態度を見せるのである。

まとめと課題

19世紀後半、大飢饉以後におけるアイルランドのナショナリズム運動は、英国による「科学主義的国家」化政策の浸透とそれにともなる同化傾向の進展を背景に、カトリック系中間層の形式的な社会的上昇が可能となったこととプロテスタント系住民の優越的地位が解体されるという状況の中で、「アイルランド的なるもの」と英国モデルを対置させる形で立ち現れてくる。ここまでの検討で、少なくとも言えることは、議会主義的ナショナリストの運動が分裂し、その受け皿としてゲーリック・リーグの運動が位置付いたことにより、第1に、アイルランドのナショナリズム運動を主導する主体としてカトリック系知識人がイニシアティブを取る状況が生まれてきたこと。第2に、アイルランド問題の解決の方向性が連合王国の枠内での自治獲得要求から分離主義的要求に向けられるようになったこと。第3に、その過程で多様なスタンスを持つ政治的ナショナリストおよび運動体を結びつける接着剤としての役割を文化的ナショナリストの運動として始まったゲーリック・リーグが担ったということの3点である。

マクニールの活動は、政治的發展に関する英国モデルを拒絶し、ゲールの価値への回帰を促す契機を与えることになった。だが、より重要なことは、かれの主張と活動は同時に、国家権力の奪取を志向する政治的ナショナリズム運動を刺激する効果を持ったということである。マクニールの主張は、これまでの体制内的なナショナリズム運動に不満を持ち、かつプロテスタントによる経済的・政治的優位を打破したいと考えているカトリック系の知識人階級の若い世代にとって、分離主義的な政治的方針とその活動に正当性を付与するものであったと考えられる。

本稿では、ゲーリック・リーグの活動とオウン・マクニールの役割を通して、政治的ナショナリズムと文化的ナショナリズムとの関係を検討してきた。本稿で明らかにした点を踏まえ、かかる2つの運動の相互関係に関する検証をさらに進めるためには、文化的ナショナリズムの運動から政治的ナショナリズムへの移行過程とその条件についての解明が重要かつ必要である。したがって、この課題を解明する手がかりとして、次にゲーリック・リーグの運動の延長線上に立ち現れるアイルランド義勇軍の結成・展開・再編の過程に照射する必要があると考える。

注

- 1) 拙稿「19世紀アイルランドにおけるナショナリズム運動と知識人(1)」(『立命館国際研究』第17巻第3号, 2005年)を参照。T. J. Durcan, *History of Irish Education from 1800*, Bala (Wales), 1972, p.40-41.
- 2) カール・マルクス『資本論』(『マルクス=エンゲルス全集』第23巻b) 980ページ。
- 3) Anthony D. Smith, *Theories of Nationalism*, New York, 1983, p.231.
- 4) *Ibid.*, pp.230-236.
- 5) Brian Barry, "Nationalism", in D.Miller, J.Coleman, W.Connolly and A.Ryan (eds.), *The Basil Blackwell Encyclopaedia of Political Thought*, Oxford, 1987, pp.352-354.
- 6) Anthony D. Smith, "Gastronomy or Geology? ; the Role of Nationalism in the Reconstruction of Nations", in *Nation and Nationalism*, Vol.1, No.1, 1995. p. 3.
- 7) Anthony D. Smith, "The Genealogy of Nations; an Ethno-symbolic Approach", Atsuko Ichijo and Gordana Uzelac (eds.), *When is the Nation? ; towards an Understanding of Theories of Nationalism*, London, 2005, pp.98-99
- 8) William Kissane, *The politics of the Irish Civil War*. Oxford, 2005, pp.1-2, 203.
- 9) John Hutchinson, *The Dynamics of Cultural Nationalism; the Gaelic Revival and the Creation of the Irish Nation State*, London, 1987, pp.15-17.
- 10) *Ibid.*, pp.40-42.
- 11) *Ibid.*, pp.12-15.
- 12) *Ibid.*, pp.114-115.
- 13) Michael Tierney, *Scholar and Man of Action*, Clarendon Press, Oxford, 1980, p.101. ゲーリック・リーグに関する研究については、小田順子「ゲーリック・リーグの拡大ー19世紀末アイルランド社会の一考察ー」(中央大学人文科学研究所編『人文研紀要』第33号, 1998年), 同「アイルランドにおけるゲーリック・リヴァイヴァルの諸相」(中央大学人文科学研究所編『中央大学人文科学研究所研究叢書 No.25 ケルト復興』2001年, 第3章)を参照。
- 14) *Ibid.*, p.21.
- 15) *Ibid.*, p.24.その他の幹部会メンバーは、C・P・ブッシュ、J・M・コーガン、ウィリアム・ハイデン、P・J・ホーガン、マーチン・ケリー、パトリック・オブライエン、T・オニール=ラッセルである。この組織はダブリンのカレッジ・グリーン4番地にあるアイルランド文芸協会の施設内で、毎週水曜日の午後8時に会合が持たれ、会費はダブリン在住の会員は6シリング、その他の地域在住者は2シリング6ペンスであった。
- 16) *Ibid.*, pp.1-9. ダグラス・ハイドはチャーチ・オブ・アイルランドの牧師の子弟である。
- 17) *Ibid.*, pp.1-6.
- 18) Brian Farrell, "MacNeill in Politics," in F. X. Martin and F. J. Byrne, *The Scholar Revolutionary : Eoin MacNeill, 1867-1945, and the Making of the New Ireland*, Irish University Press, Shannon, p.183-184.
- 19) 「アン・クレイヴ・ソリッシュ」とは、アイルランド語で「光の剣」という意味。
- 20) Brian O'Cuin, "MacNeill and the Irish Language," in F. X. Martin and F. J. Byrne, *the Scholar Revolutionary: Eoin MacNeill, 1867-1945, and the Making of the New Ireland*, Irish University Press, Shannon, pp.3-4. pp.6-7.
- 21) *Ibid.*, p.57.

- 22) ゲールタハト地域は、アイルランド・ゲール語を話す地域の総称である。1922年段階、アイルランド語はウォーターフォード、コーク、ケリー、コールウェイ、マーヨ、ドニゴールの各カウンティにおいて主に話されている言語とされていた。クレアやキルケニー、ルースの各カウンティにも部分的に話されていたが、ゲールタハトとは考えられていなかった。1970年にゴルウェイ・カウンティのキャスローにアイルランド・ゲール語のラジオ局が誕生し、1979年に政府によりゲールタハト地域の開発機関が設置されたが、現実にはアイルランド・ゲール語話者の減少の中で、ゲールタハトという概念が成り立つのかどうかを疑問視する声もある。
- 23) Brian O Cuiv, "Irish language and literature, 1845-1921," in W .E. Vaughan, *A New History of Ireland VI: Ireland under the Union II 1870-1921*, Oxford, 1996, pp.407-408.
- 24) Eoin MacNeill, *Irish in the National University of Ireland ; a Lea for Irish education*, Gaelic League Pamphlet, Dublin, 1908, pp.9-10.
- 25) Brian Farrell, *op.cit.*, p.188.
- 26) Michael Tierney, *op.cit.*, pp.67-59.
- 27) John McGarry and Brendan O'Leary, *The Politics of Antagonism: Understanding Northern Ireland*, London,1996. p.86.
- 28) F. S. L. Lyons, *Ireland since the Famine*, London, 1985, pp.195-201.
- 29) *Ibid.*, pp.158-152.
- 30) John McGarry and Brendan O'Leary, *op.cit.*, pp.86-87.
- 31) David Fitzpatrick, "The Irish in Britain,1871-1921", in W .E. Vaughan, *A New History of Ireland : Ireland under the Union, 1870-1921*, Oxford, 1996, pp.678-679.
- 32) *Ibid.*, pp.86-87.
- 33) *Ibid.*, p.87.
- 34) J. C. Beckett, *The Making of Modern Ireland 1603-1923*, London, 1981, pp.398-400.
- 35) Alan O'Day, *Irish Home Rule 1867-1921*, Manchester, 1998, Document 6, pp.319-320.
- 36) Edmund Curtis, *A History of Ireland*, London, p.384.
- 37) *Ibid.*, pp.379-385.
- 38) Edmund Curtis and R.B.Mcdowell (eds.), *Irish Historical Documents 1172-1922*, London, 1943, pp.287-292.
- 39) John McGarry and Brendan O'Leary, *op.cit.*, p.90.
- 40) *Ibid.*
- 41) *Ibid.*, pp.90-91.
- 42) Edmund Curtis, *op.cit.*, pp.388-389. こうした政策は、アイルランド人小作に対して、自分が耕作する土地の買い上げを容認する内容を盛りこんだウインダム法（1903年）に代表される。
- 43) B. M. Walker (ed.), *Parliamentary Election Results in Ireland 1801-1922*, Dublin, p.171.
- 44) F. S. L. Lyons, *op.cit.*, pp.195-201.
- 45) *Ibid.*, pp.198-204.
- 46) John Hutchinson, *op.cit.*,pp.163-164.
- 47) *Ibid.*,pp.175-176.
- 48) Eoin MacNeill, *Phases of Irish History*, Kennikat Press, Port Washington (New York), 1919, p.97.
- 49) *Ibid.*, pp.95-97.

- 50) *Ibid.*, pp.31-35.
- 51) *Ibid.*, pp.222-224.
- 52) *Ibid.*, pp.153-155.
- 53) *Ibid.*, pp.224-226.
- 54) *Ibid.*, pp.320-322.
- 55) Eoin MacNeill, "Why and how the Irish Language is to be Preserved," in *Irish Ecclesiastical Record*, Vol. XII, Dublin, 1891, pp.1099-1102. (<http://www.archive.org/details/3sp2irishecclesi12dubluoft> [検索日 2008年9月25日])
- 56) *Ibid.*, pp.1103-1106.
- 57) Eoin MacNeill, *Phases of Irish History*, pp.4-5.
- 58) *Claidheamh Soluis*, 5 October 1907, pp.7-8.
- 59) *Claidheamh Soluis*, 26 September 1908, p.9.
- 60) *Census of Ireland 1881 : General Report*, 1882.および *Census Ireland 1911 ; General Report*, 1912-1913.より算出した。
- 61) John Hutchinson, *op.cit.*, p.188.
- 62) *Ibid.*, p.187.
- 63) Eoin MacNeill, "Irish Educational Policy", in *Irish Statesman*, No.5, Dublin, 1925, p.168.

(南野泰義, 立命館大学国際関係学部教授)

Irish Nationalist's Movements and Intelligentsia in Modern Ireland（Ⅱ）

The purpose of this paper is to show that cultural nationalism and political nationalism have been significant ideological forces that have been adopted by a rising intelligentsia as a political option against the state. Cultural nationalism and Political nationalism represent two different conceptions of the nation, and form distinctive organisations and political strategies.

Cultural nationalists perceive the nation not as a state but as a historical community and promote a communitarian vision of the nation. By contrast Political nationalists perceive the nation as a homogeneous collectivity of citizens and promote a state-oriented programme.

Firstly, The aim of this paper is to explain and the conjunction between Irish nationalist's movements and intelligentsia in Modern Ireland.

Secondly, in this paper, the purpose is to show activities and background of Gaelic league (1893) as a movement of Irish cultural nationalism. Although many scholars have tended to concentrate on Douglas Hyde as the first president of Gaelic League in studying on this organisation, I want to focused on Eoin MacNeill, as important figure of the Irish cultural nationalist (1893-1915), who was one of founders of Gaelic League and political nationalism. Because MacNeill was the architect, philosopher and organizer of Gaelic League and he was driven himself into political movement which was Irish Volunteers founded in 1913.

(MINAMINO, Yasuyoshi, Professor, College of International
Relations, Ritsumeikan University)